やまと万葉がたり

たらちねの 母が養ふ蚕の 繭隠り いぶせくもあるか 妹に逢はずして

（作者未詳 巻十二・二九九一）

3月8日はミツバチの日です。ミツバチの巣は正六角形で構成されており、見た目に美しいだけでなく、衝撃を分散させ、かなりの強度が生まれるそうです。航空機や建築資材などの人工物にもハニカム（ハチの巣）構造が取り入れられています。ハチたちがなぜそんな完全な形を作ることができるのかは不明ですが、自然の神秘を感じます。

『万葉集』にもハチが登場します。といっても、歌の表現ではなく文字の中です。

この歌は、カイコが繭をつくるのをたとえに用いた恋の歌ですが、当時はまだひらがなやカタカナが無く「垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而」とすべて漢字で書かれていました。「馬聲」はウマのいななき「イー」から「い」という音を、「蜂音」はハチが飛ぶ音「ブブ」から「ぶ」の音をあらわしています。「石花」は甲殻類のカメノテの古い呼び名である「せ」を、「蜘蛛」はクモのことで「くも」の音をあらわしており、「馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿」で「いぶせくもあるか」となります。戯書といわれる特殊な漢字の使い方です。古代の人にとってウマの鳴き声が「イー」と聞こえたらしいのも面白く感じます。

「いぶせし」とは、心が晴れず憂鬱な状態をいうことばで、愛しい女性に逢えないでいる心情を表現しています。それをカイコが繭にこもるように、と昆虫の生態でたとえたのは、当時の人々にとって養蚕が身近だったことによると考えられます。表記の中だけとはいえ、ウマやハチやクモやシカが登場するのも同じ理由だったと思われます。いずれも益獣や益虫であり、短歌一首の中に古代の人間の生活環境が垣間見えるような気がします。

【訳】足乳根の母が養うカイコが繭ごもりするように、心がこもってうっとうしいよ。妻に逢わずにいると。

（県立万葉文化館企画・研究係長・井上さやか）

駒造る 土師の志婢麻呂 白くあれば うべ欲しからむ その黒色を

巨勢豊人(巻十六・三八四五)

やまと 万葉がたり

この歌は、土師志婢麻呂が巨勢正月麻呂(正月麻呂は巨勢豊人の字)に対して詠んだ歌「ぬばたまの斐太の大黒見るごとに巨勢の小黒し思ほゆるかも(斐太の大黒を見るたびに、巨勢の小黒のことが思い出されるよ)」(三八四四番歌)の返歌として、正月麻呂が志婢麻呂に対して詠んだ歌です。

「斐太の大黒」とは飛騨(現在の岐阜県北部)産の黒馬のことを指し、「巨勢の小黒」とは色黒である正月麻呂のニックネームです。志婢麻呂は「黒馬を見るたびに巨勢正月麻呂の色黒の顔を思い出す」と歌い、対して正月麻呂は「馬造りの土師志婢麻呂は色白の顔だからその黒色が欲しいんだろう」と歌でやり返します。馬をキーワードとして色黒と色白の男性2人が互いの顔色を笑い合うというやり取りで、『万葉集』にはこのような身体的特徴を笑いの題材とした歌が他にもあります。

この歌に見える「駒造る土師」は、志婢麻呂が属する土師氏の職掌にちなむ表現です。古墳から出土する代表的な遺物といえば埴輪ですが、埴輪には馬を形象したものが多くあります。「駒造る」とは、馬形埴輪を製作するという意味なのです。

『日本書紀』が伝える土師氏の氏族伝承によれば、土師氏は天皇の葬儀に際し埴輪を造って陵墓に立てる仕事を古くから行ってきたとされ、大和や河内の天皇陵の近くには埴輪造りや陵墓築造など天皇の葬儀全般を掌った土師氏の居住地が分布することが知られています。「土師」の語源は「ハニシ」すなわち土(はに)を素材として物を造る職人のことで、埴輪造りの技術者および彼らの統率者が氏族としてまとまった集団が土師氏です。土師氏はその氏族名や居住地から、古墳が造られなくなった奈良時代になっても陵墓や埴輪と縁の深い氏族として人々に記憶されていました。正月麻呂は、志婢麻呂の氏族名から馬形埴輪をとっさに連想して、このような歌を詠んだのでしょう。

(県立万葉文化館主任研究員・竹内亮)

【訳】馬を造る土師の志婢麻呂は色が白いので、なるほど欲しいのだろう、その黒い色を。